

研究課題	『子供の手のひらに図書館を』
副題	～電子書籍を活用した児童の学力向上～
キーワード	知れば知るほど興味がわく 興味がわかれば知りたくなる！読みたくなる！
学校/団体名	埼玉県吉見町立西小学校
所在地	〒355-0152 埼玉県比企郡吉見町和名 50
ホームページ	<a href="https://sites.google.com/view/yoshiminishiedjp">https://sites.google.com/view/yoshiminishiedjp</a>

## 1. 研究の背景

### 【デジタル書籍のチカラで、子供たちを言葉の森へ!】

本校は、全9学級（通常級6＋特支級3）、全校児童116名の小規模校である。今回の研究の背景には、本校の課題の一つである、学力面における課題がある。それは、全国学力・学習状況調査、埼玉県学力・学習状況調査の結果において、文章読解力に大きな課題があるということである。そこで、本校では「初めて読む文章」にも抵抗なく対応できるよう、昨年度の10月より、試験的にデジタル電子書籍『Yomokka!』の導入を図ったところ、西小全体でひと月に平均20冊、ページ数で約800ページの読書量を記録した。一方で、現在、本校図書室の本の貸し出しについては、図書委員会による手書きの貸し出しカードによって実施されており、各児童の読書量は、合計冊数しか把握できておらず、ひと月の本の貸し出し平均も、児童一人当たり約3冊と低迷している。これらの現状を踏まえ、読書量の確保は、家庭環境によるところも大きく関連することから、どの児童にも等しく書籍にふれる機会を提供すべく『子供の手のひらに図書館を』～電子書籍を活用した児童の学力向上～と題して、各教科と電子書籍、リアルな書籍を関連させながら、ICTを活用した児童の学力向上に一石を投じたいと考えた。

## 2. 研究の目的

### ◆教育活動的側面からの意図・目的

いわゆる「デジタルネイティブ」と呼ばれる子供たちにとって、インターネットを使っでの検索や動画視聴は日常的なものとなっている。一方で、本校においては、児童の活字離れが進み、本をたくさん読む子とそうでない子の二極化が進んでいる。しかし、本を読まない子は、本が嫌いなのではなく、本を読む環境が十分ではないことも要因となっていると考えた。

そこで、御社の助成を活用し、GIGA スクール構想によって整備された一人一台の端末に、電子書籍『MottoSokka!』を取り入れる。そして、本校の課題となっている読解力の向上を目指し、まずは、家庭環境による書籍保有量の格差をなくす。また、電子書籍を利用し、読書に触れる機会を全児童に等しく提供する。こうした読書量の確保や身近に書籍を置く環境を整備することで、さらなる学力の向上につなげていく。

◆研究的側面からの意図・目的

電子書籍サービスが提供する「児童利用状況」を効果的に活用することで、児童個々の「閲覧冊数」や「読んだページ数」、「読了冊数」や「読書時間」等のデータを統計的に把握することが可能となる。このデータを活用し、読書量の多い児童と文章読解力との相関関係や、読書活動を充実させることで、学校全体の読解力の向上にどれだけの影響を与えるのかについて、「統計的に把握すること」を目的としている。そして、本校の課題である読解力の向上と、読書との関連を広く保護者とも共有することで、学校と家庭が連携して学力向上に取り組むための機会とする。

3. 研究の経過

【中間レポート1つ目】

ポプラ社が配信する図書情報提供サービス「MottoSokka!」の中にある「朝日小学生新聞」を活用した。多くの情報から必要なものを精選して読み取る読解力や社会の事象を自身との関わりで捉えようとする主体性を伸ばす取組の一環としてこれからも続けていく。



【中間レポート2つ目】

11月は読書月間ということで、「おすすめ図書」をはがきに表示して地域の方へ実際に紹介する活動を全校で取り組んだ。本を探すだけではなく、相手に合わせた本を心をこめて選ぶ姿が見られた。目的に応じて情報を探す活動を通して、情報を活用できるスキルをこれからも伸ばしていく。



【中間レポート3つ目】

「総合的な学習の時間」において、自分の将来の夢についてプレゼンを行う学習を行った。ポプラ社が配信するサービス「MottoSokka!」で、目指す職業について、発表したい内容に合わせて電子書籍から読み取り、資料に生かすことができた。キャリア教育でもICTを活用した取組を推進したいと考えた。



また、10月終了の時点で各学年の読書量は以下の内容となっている。

【閲覧冊数】		【読了ページ数】	
1年生…1423冊	4年生…885冊	1年生…46801ページ	4年生…40456ページ
2年生…1211冊	5年生…525冊	2年生…34889ページ	5年生…21079ページ
3年生…789冊	6年生…838冊	3年生…32032ページ	6年生…30910ページ

どんどんと児童が読書活動にのめり込んでいく様子が見られた。

#### 4. 代表的な実践

##### (1) 「Yomokka！」 ～読書を楽しもう～

「Yomokka！」のコンテンツの中での「学校人気図書ランキング」を活用し、学校での人気図書を学年ごとに掲示した。また、「今日のオススメの本」というコンテンツも意識的に紹介することで、読書への入り口として位置づけ、楽しく読書をする機会を提供することができた。本については休み時間などの短い隙間時間にも借りに行かずに読書ができ、友達同士で本を取り合うこともなくなり、それぞれのタブレットを見ながら隣り合って同じ本を読んでいる様子も見られた。



##### (2) 「国語科と関連した並行読書」 ～学習を深めよう～

国語科で実施している教材と関連のある書籍一覧が示されており、似た文章構造やテーマで、並行読書をして理解を深めることができた。従来であれば、図書室の限られた本で平行読書をするか、市立図書館からの本の取り寄せを待つしかなかった。しかし、このコンテンツを活用することで多くの本や情報に触れることができ、さらに児童が本の順番待ちをすることなく読書を行うことができ、効率的かつ時間を有効に活用することができた。さらには、テレビのスクリーンに映すことで全員で本の内容を共有でき、結果、授業も中身の濃いものになった。



##### (3) 「朝日小学生新聞」 ～話題を広げよう～

毎日、「朝日小学生新聞」のトップ記事が更新されており、毎日のドリル学習としてクラウド上に児童が『感想』や『意見』をアップした。読む活動だけではなく、自分の考えや意見を持つ能力の向上を図ることができた。

宿題では読み取りや要約を行うことで、文章力や要約する力が身に付いてきている。



(4) 「8月夏休み読書キャンペーン」 ～夏の読書王に俺はなる！～

夏休みを活用し、読書活動を積極的に行うよう呼びかけた。ただ呼びかけるだけではなく、様々なコンテンツを活用したり、幅広いジャンルの読書が行えるようジャンル別カードを作成し、読んだものはスタンプを押したり、夏休み明けには学年ごとの読書王を発表した。夏休み中に読書の様子を教員側も把握できたことは今までにない取組である。



(5) 「10月読書月間キャンペーン」

図書委員会の児童が中心となって『図書委員郵便局』を開設した。内容としては、実際に1人2枚購入した葉書に児童1人1人がオススメの本の紹介を書き、学校に図書委員が自作した設置ポストに投函をする。さらにそれを図書委員が実際のポストに投函する。郵送先は友達、学年を超えた児童、家族や離れた場所にいる祖父母の家などとした。この活動を通して①図書委員会の児童が積極的に企画運営したこと②校内で読書に興味をもつ機会になったこと③お互いに紹介することで読書の興味の幅が広がったこと④本を紹介することの楽しさや共有することの楽しさを体験できたこと⑤様々な人と関わりが持てたこと⑥校内にとどまらず、身近な人とも読書活動が共有でき、協力も得られたことが大きな成果として挙げられる。また、「先生が子供の頃に読んだ珠玉の5冊」展示会を行うことで、教職員も一緒になって活動したことが、児童の興味関心にも繋がっている。



(6) 「Sagasokka!」 ～情報を活用しよう～

調べ学習や、課題追及のための書籍が充実しており、自らの課題解決のために最適な情報を書籍から見つけ出す活動を充実させることで、読解力の向上を図ることができた。また、語句調べも授業や宿題の際、効果的な活用ができていた。実際に調べたことから興味がわき、実物を作ろうとする児童も表れ、意欲や意識の変容が見られた。



## 5. 研究の成果

### (1) 一人一台端末への電子書籍のインストール

GIGA スクール構想で整備された一人一台端末に、電子書籍サービス『Yomokka!』をインストールし、これまで学校のロッカーで管理していたタブレット端末を、毎日家庭に持ち帰るスタイルに変更した。このことにより、いつでも電子書籍にアクセスする環境が整った。また、家庭環境により生じる、図書と触れ合う機会の格差を是正し、すべての児童がいつでも、どこでも、誰でも、等しく書籍にアクセスできるようになった。

### (2) 朝読書、授業、家庭学習での活用

朝読書の時間を中心に、学校教育活動の中で、電子書籍にアクセスする機会を意図的に仕掛け、すべての児童が読書に触れ、楽しさに気付くことができるような活動を展開することが可能となった。

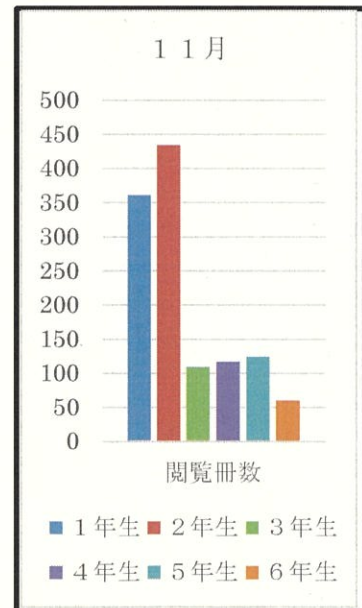


### (3) 読書量の統計的な管理

本校の図書室の書籍は、これまでは、図書委員会の手書きカードによる貸し出しとなっており、統計的な読書量の管理が図られていなかった。本サービスを導入することで、どの児童がどれくらいの読書量があるのかを統計的に示すことができるようになった。

### (4) 読解量の飛躍的な向上

これまで一人あたりの月別貸出冊数が3冊程度だったのに対して、電子書籍では月平均7冊へと向上が図られた。また、冊数だけではなく、読書時間、既読ページ数のデータについては、これまで集計することが困難であったが、それらも統計的に把握することが可能になった。さらに、意欲的に読書をしている児童を的確に賞賛できるようになった。



### (5) 読書の質の向上

本サービスには、本を読み、感想を書き込むとポイントがもらえる機能が付帯しており、読むだけではなく、自分の考えを掲示板で表現できる児童も増えてきている。また、学校で人気図書ランキングも表示されることから、これまで読んだことのない分類の本も、積極的に読む児童が増えていることが統計から読み取ることができる。これらの読書の質の向上を通じて、本校の課題である読解力がどのように改善していったかについて、令和6年5月に実施された埼玉県学力学習状況調査で示される結果の検証を図ることができた。

### (6) 授業との連動

本サービスには、各教科のどの場面でどんな本が活用できるかを示した一覧表が公開されている。例えば、国語科では、毎日更新されている「子ども新聞」の一面記事を活用した意見文を書いたり、生活科では野菜や虫などの関連する



書籍を見ながら学習を進められたり、授業と連動することで活用を図ることができた。

(7)子どもの活動の充実

図書委員会を中心として、電子書籍を利用した「図書委員郵便局」を実施した。教師から与えられて活動するのではなく、児童が自発的に活動を計画する姿が見られた。読書活動を通じて異学年での交流も生まれるなど、読書の枠を超えた広がりがみえている。また、家庭とも連携して推進し、理解を深めることでより読書活動の幅広い充実が図れた。

(8)単元テストの推移

読書量が最も多かった児童の各学期の国語テスト平均点

	4年生	5年生	6年生
1学期	90点	86点	92点
2学期	92点	90点	93点
3学期	95点	88点	96点

読書量が最も少なかった児童の各学期の国語テスト平均点

	4年生	5年生	6年生
1学期	58点	46点	66点
2学期	64点	55点	66点
3学期	66点	73点	70点

上記表は、読書量と国語科単元テスト結果との一つの参考考察になると考える。読書量が多かった児童は国語の平均点が高い傾向にあると読み取ることができる。また、読書量が少なかった児童は平均点が低い傾向にあると読み取ることができる。

ただし、平均点が高い児童は日頃からテストの平均点も高く、授業への意欲も高い。しかし、本取組を通して、一定の成果は数値に現れたと考える。なお、初見の教材の問題については、読書量がテストの平均点に必ずしもつながっているとは断言できない側面もある。

(9)埼玉県学力調査の結果から

埼玉県学力学習状況調査正答率：5・6年生

	県（読むこと）	市町村（読むこと）	本校（読むこと）
5年生平均正答率	48.0%	38.0%	21.1%
6年生平均正答率	49.4%	46.3%	40.6%

埼玉県学力学習状況調査（昨年度と比較しての伸び率）：5・6年生

	5年生	6年生
国語	55.0%	68.8%

読むことについての平均正答率は依然として低い傾向にある。

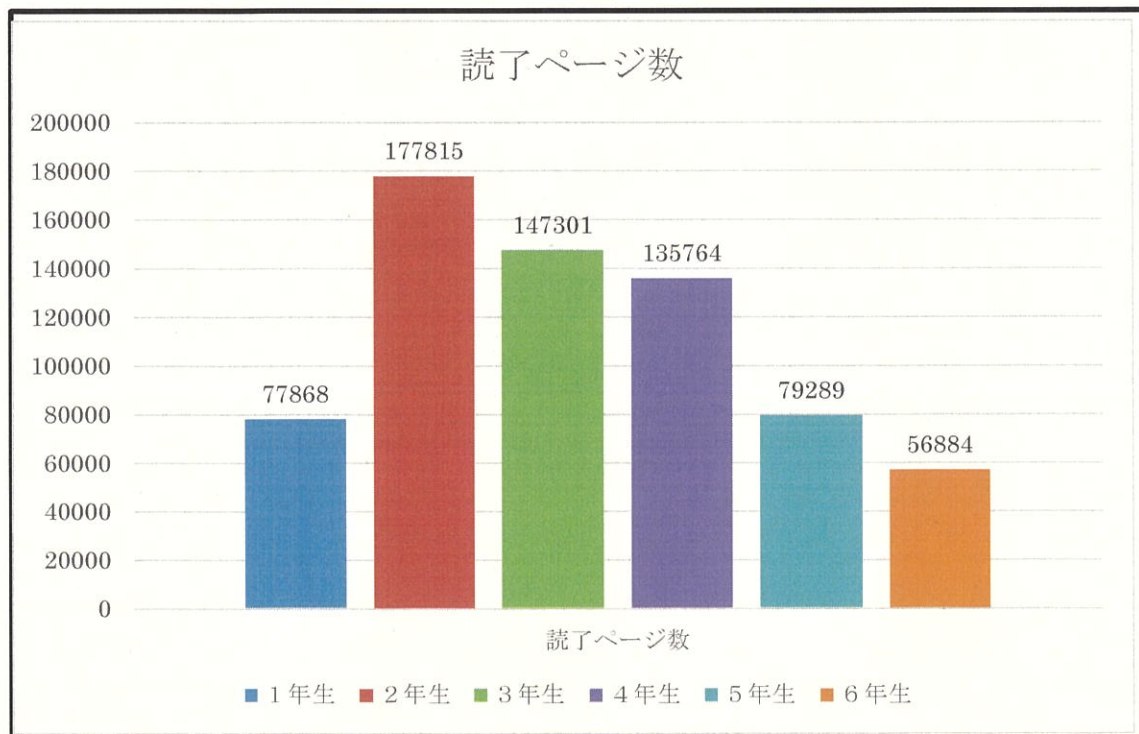
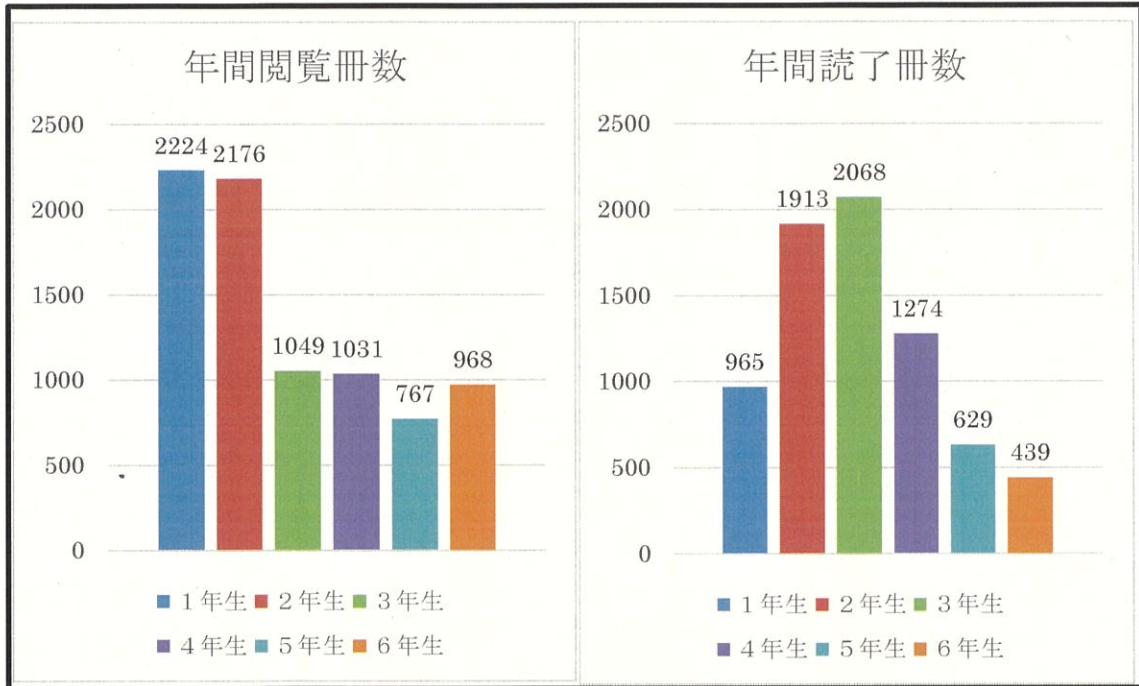
ただし、国語の（作年度からの）伸び率については5・6年生ともに50パーセントを超

えている。これは、読書量が関係していることも考えられる。

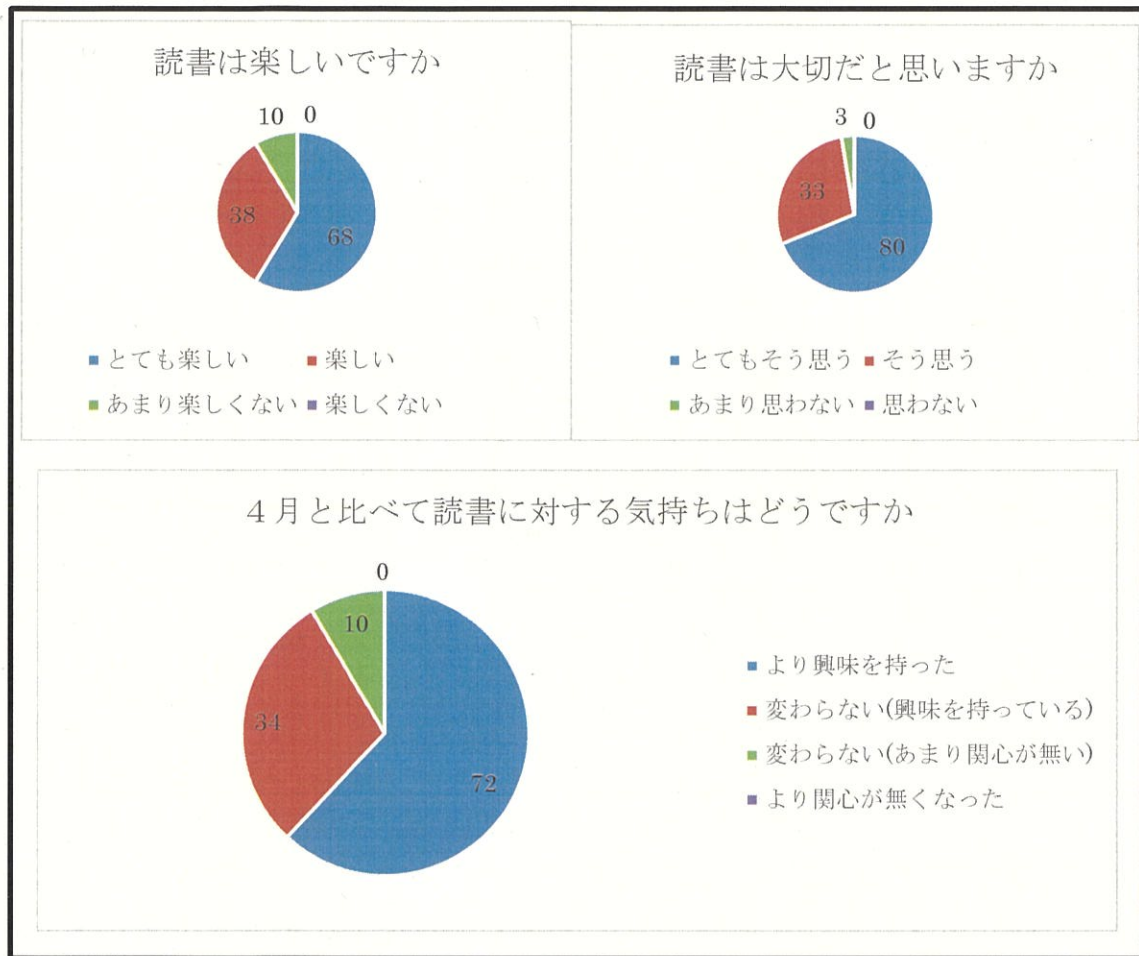
また、今年度の全国学調のアンケート調査結果では、電子書籍の活用をきっかけにICT機器の活用が習慣化し、全国学調のアンケートでは「十分に活用している」が100%であった。

(10) 年間の読書の取組について

昨年度との比較はできないが、本サービスの利用により、読書量は間違いなく増えたと言える。



(11)アンケートから見える児童の読書に対する気持ちの変容



次は、読書の量ではなく、質の側面からの考察である。年度末に行ったアンケートの結果、『読書は楽しいですか』のアンケートについて「楽しい」と答えた児童は全体の90%以上であった。年間を通して読書が楽しいと思いつながら取り組めた児童が多かったことが数値に表れて分かった。実際に、各学級で時間があると「読書をしたい」と話していた児童の様子も見られた。

また、『読書は大切だと思いますか』の質問について、「そう思う」と答えた児童は95%以上だった。理由は、「楽しい」や「ドキドキする」の他、「今まで知らなかったことが分かるようになるから」や「主人公の気持ちになって本当に物語の中に入ったような気持ちになれる」、「文章を読むのが早くなった」「国語の文章の問題が得意になった」など、様々な意見があった。

『4月と比べて読書に対する気持ちはどうですか』の質問に対しては「より関心をもった」が60%以上で、これは、この一年間を通して、より充実した取組ができたことを考察することができる。電子書籍の活用内容から、電子書籍の功績は大きいことも伺える。また、「変わらない(興味を持っている)」を含めると90%を超えていることから、この取組が読書の充実に繋がっていることが分かる。



## 6. 今後の課題・展望

今回の取組のみで読解力、国語の学力向上に繋がったかは、今回の結果から断定することは難しいと感じた。しかし、今回の取組が読書量向上や読書に関する意欲付けに直結していることは間違いない。良かったところは引き続き継続し、他の視点や手立てからも様々な検証を行い、新しい手立てもどんどん講じていきたい。また、少数の児童が「読書はあまり好きではない」と答えた。どうして好きでないのか、好きでなくともその効果は実感しているのか、どうすれば抵抗なく読書ができるのか検討し、解消に向けていく。さらに、そのことが今後の読書嫌いをなくす大きなキーワードになるであろう。



本校を含む吉見町全体で、今年度から同様な電子書籍が導入された。一年先に取り組んでいた本校が、引き続き読書活動の充実を図っていきたい。また、必要とあれば町全体に本校の取組を広げていき共有するとともに、町全体の学力向上の1つの手立てとして行っていきたい。

## 7. おわりに

読書量が確保でき、どの児童にも等しく書籍にふれる機会を提供することができた。また、ICTを活用した取組も派生して深まったと実感している。

また、電子書籍サービスが提供する「児童利用状況」を効果的に活用することで、児童個々の「閲覧冊数」や「読んだページ数」、「読了冊数」や「読書時間」等のデータを統計的に把握することが可能となり、様々な効果を発揮したことも大きな成果である。

それにとどまらず、小規模校で、担任が図書室管理も兼務しなければいけない現状の中、児童だけではなく教職員にとっても大きな効果を実感しつつ、抵抗なく簡単に取り組めるため業務効率化や負担軽減に繋がっている。

読書の効果により文章読解力が大きく改善されたかという点、まだまだ継続や追跡調査の必要性を感じるが、部分的に成果を大きく感じることができたのは、今後を見据えて大きな一歩だったと感じている。学力向上関係については課題を明確にし、継続・新たな手立てを講じていながら取り組んでいきたい。

このような機会、チャンスをいただいたことに、心からの謝意を表し、結びとしたい。

## 8. 参考文献

なし